

---

# フランダースの子

露露

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フランダースの子

### 【Nコード】

N6680I

### 【作者名】

露露

### 【あらすじ】

雪の降りしきるホワイト・クリスマス　心優しいエディは笑い、泣き、そして、出会う。聖なる夜に、奇跡は起きるのだろうか？

## フランダースの子1

フランダースの子

きよしこの夜 星はひかり

すくいの御子<sup>みこ</sup>は まぶねの中に

眠りたもう いとやすく

今年は雪がよく降っていた。

もともと多く積もる地域でもあったが、今年はまるで降り止むことを知らないかのようなだ。

ふわふわと綿のような大粒の雪が全てを白く染めていた。

十二月は色とりどりの装飾があちこちでなされ、真っ白な町を美しく染め上げる。

ちらちらと絶え間なく点滅する虹色の明かりは夜になると最もきれいで、どの店も建物も道も公園も、それがまるで暗黙の了解であるかのようにそれぞれが工夫を凝らし飾り、この月の含む喜気と神聖さをいつまでも照らし出している。

もう数時間もすればその幻想的な景色が広がるという頃になると、町は白い息を吐きながら少々足早に通り過ぎる人と、雪のせいで少し速度を控えた馬車とで埋め尽くされる。町のメイン通りが一日の中で一番賑やかになる時間である。

理由はさまざまだ。仕事を終えて家路を急ぐ俯きかげんの人たち、学校帰りの解放感を全身で表現する楽しげな子どもたち、夕飯の支度のため買い物へ向かう主婦、そしてそんな人々を狙って商売をす

る街頭の物売りもこの時間帯が一番多かった。

この寒さであったが、通りは相変わらず人々の威勢のいい声、笑い声、馬車の軋む音など心地のよい喧騒に包まれていた。

この賑やかな通りを、今にも足をとられて滑りそうになるほど大きな歩幅で歩いていたエディは、前方を見詰めながら腕に抱える買物袋を抱え直した。しかし、手袋を嵌めているせいでまた滑り落ちてくる。

何回かそれを繰り返した後、仕方なく一旦足を止め、今度は丁寧に抱え直す。視界が半分ほど遮られたが、目的地まではすでに目と鼻の先であったのでそのまま歩き出した。今度は少し慎重に、一步一步確実に踏み出す。

エディの履くブーツは特別雪道に対応したものではないが、とても慣れた歩き方だった。生まれてこの方、一度もこの町を出たことの無い彼が自然と身につけたものである。

角を曲がってすぐの通りに面した緑のドアの前でエディは立ち止まった。ゆっくり階段を登り、そこで抱えていた袋を地面に置く。

ふうと息を吐くと、彼の身長より高めの位置にあるチャイムを、腕を伸ばして鳴らした。すぐに、笑顔の少女が顔を出す。

「エディ、おかえりなさい。ママ、エディが帰ってきたわ！」

少女は奥に向かってそう叫び、もう一度エディに笑顔を向けて部屋の中へ入って行く。入れ違いに少女の母親が顔を出した。

「ごころうさまエディ」

「あの、これ」

エディは言いながら地面から買物袋を再度持ち上げると、こやかに立っている婦人へゆっくりと手渡した。

「ちゃんと揃っていると思います。何度か確認しました」

「そう、ありがとう。外は寒かったでしょう、少し中で温かいものでも飲んでいかない？美味しい紅茶があるのだけれど」

そうして促された部屋の奥からは、今日の夕食だろうか、とてもいい匂いがした。それと同時に先ほどの少女の笑い声と、ここで飼

われている犬の鳴き声も聞こえてくる。

どたどたと部屋を走り回る音に婦人は堪らず振り返り、「すこし静かにしなさい」と声をかけた。

「ごめんなさい、騒がしいわね。さ、遠慮なく上がってちょうだい。あの子もあなたのこととても気に入っているのよ」

「ありがとうございます、でも今日はもう帰らないと」

「そう、残念ね。それじゃ、これ」

婦人は一枚の紙幣を取り出しエディの手に握らせた。

「またよろしく」

「はい」

エディは軽く会釈を返すと、紙幣をポケットに仕舞い婦人の家を後にした。間もなくして扉が閉められる。

エディも角を曲がり先ほど通った賑やかな通りへとその身を紛れ込ませた。

数メートル程歩いて、大きな色褪<sup>あ</sup>せたサンタクロースのおじさんが笑顔を向ける小さな店の扉を、エディは慣れたように両手で押し開けた。

キィ、と軽く軋む音に薄暗い店の奥のカウンターに座っていた一人の老人が顔を上げる。ずいぶんとずれ下がった老眼鏡の上の隙間からエディの姿を見止めると、年季の入った呟きのような掛け声とともにゆっくりと腰を上げた。

「ドクター、こんにちは」

「やあ、エディ、外は寒いね。雪が降っているかい？」

「朝からずっとです。このまま町が埋もれてしまっんじゃないかって心配」

「知っていたかい？そんな時のためにだいたいの家があんなにも高く造つてある。いつものやつだろう？」

ドクターは背後にある棚から小さな四角い包みを二つほど手に取り、カウンターに置いた。

「知らなかった。それなら安心しました。一つはいつもの、もう

「一つは？」

「茶色の包みがいつもの薬。この白いのはおまけのキャンディだよ」「キャンディ」

「最近よく来る客が私にくれたんだがね、甘い物は控えているところなんだ。なんとか産の珍しい物だそう。ただし、味は保証せんがな」

愉快そうに笑う眼鏡越しの瞳を見つめて、エディも笑顔になる。

包みを手に取り丁寧に礼を言くと、代わりに貰ったばかりの紙幣をカウンターへ置いた。少しだけ息の漏れる音が耳に届く。

「支払いはいつでもいいと言っているじゃないか」

「でも、そうやっていつも払っていない。ドクターが奥さんに怒られるよ」

「エディ、わしは悪い人間でね、人によって価格が変わるんだ。決して怒られたりはしない。これは内緒だぞ」

「ドクター……」

何か言いたげにじっと瞳を向ける少年へしわの寄った大きく温かい手が伸び、毛糸の耳付き帽子の上へそのままぽんと乗せられる。

「いいかい、よく聞き。これは元名医であるわしが出す処方箋だ。それで栄養のある野菜と肉を買って、カレンに食べさせてあげなさい。いいね？」

優しい眼差しと声音がエディの首を縦に振らせた。いつもいつもこうやってただで薬を売ってくれるドクターに、どれほど感謝の言葉を並べても足りないのは分かっているが、それでも今はそうすることしか出来ない。

エディは何度もお礼を言ってドクターを見上げた。その時、細められていた瞳が完全に隙間を失くす。

「いい子だ。メリー・クリスマス！」

「メリー・クリスマス、ドクター！」

そう言つと入り口に歩み寄り、キィ、と扉を軋ませ、小さな背中  
は真っ白な世界へと消えた。

ドクターはそれを見送り、今度は深く深く溜息を吐く。

「あと二日でクリスマスだよエディ。……。お前もまだ子どもなんだ、一年に一度くらい、自分の欲しい物を願うといい。きつとその願いは届く……。主よ」

胸前で十字を切ったドクターは、誰もいない店の扉を見詰め首を振る。

瞳に映るのは、静かに降り積もる雪ばかりであった。

\*\*\*

町から歩いて一時間の郊外にある住居群の一室に、エディは叔母であるカレンと二人で住んでいる。病弱な叔母が冬になつてずつと体調を崩しているため、定期的に行きつけの医者であるドクターの所へ薬を買いに行っていた。

ただの風邪だと叔母は言うが、エディはいつも心配だった。ひどく咳き込むたびに言い知れぬ恐怖に襲われる。

叔母を思い顔には出さないようにしているが、心の中では必死に「主よ、主よ！叔母にご加護を！」と、祈りを叫ぶのが常であった。クリスマスの迫る最近、不安定だった体調もとても安定している。エディにはそれが何よりも嬉しかった。

「まあエディ！歩いて帰って来たのかい、顔を真っ赤にして、寒かったろうに」

「レベツカさん、こんにちは。大丈夫です、慣れていきますから」

「こんな大降りの日くらい馬車を使いなさい。あなたまで風邪を引いたらどうするの」

そう言いながら、同じ棟の階下に住むレベツカはエディの頭や肩

に積もった雪を手で払ってやっている。

彼女は四人の子持ちだが元来面倒見がよく、カレンのことも毎日様子を見に行っていた。

「今日はどうですか」

「大丈夫。さつきも様子を見に行つたのだけど、ずいぶん体調も戻つたみたいだよ。早く顔を見せておあげ」

エディは頷いて階段を駆け上る。二階の一番奥の部屋の戸を開けた。

「叔母さん、遅くなってごめんなさい」

ドクターの処方箋通り購入した物をテーブルに置き、帽子と手袋とマフラーと上着を順番に洋服掛けへ掛ける。

そうしてやっと奥を覗くと、ベッドに座つて穏やかに笑顔を向ける叔母の顔にぶつかった。歩み寄り、ベッドの端に腰をかける。

「調子いいみたいだね。良かった、薬が効いたのかな」

「ただの風邪だもの、じきに良くなるわ」

「そう言つてもう一月も寝込んでいるんじゃないか。叔母さんの“じきに”って一体どれくらい長いの」

微笑んで叔母はエディの両手を握つた。

「そうねえ、春になればまた元気になるわ。だって冬はとても寒いでしょう。お前の手もこんなに冷たい」

「それって冬眠」

「そう、叔母さん式の冬眠。でも、クリスマスはわくわくするから眠つていられないわ」

二人同時に笑い、エディは床に足をつけて立ち上がる。

「夕飯の支度をするよ。今日はドクターから大事な処方箋を貰つたんだ。それで買い物をして、あ、そうそう、市場のロッドさんが今日も安くしてくれて、ちよつとだけ肉を買えたんだよ。パンはまだあつたはずだから、温かいスープを作るね。あ、それからね」

エディは慣れた手つきで支度をしながら、一日の出来事を語つて聞かせた。叔母は時々相槌を打ちながらその話に耳を傾けている。



窓の外はすでに夜の帳が降り、窓ガラスは更に白さを増した。

叔母の体調が悪い時、食事はたいてい叔母のベッド際にテーブルを移動させて一緒に食べる。そのためエディにも動かせる小さなテーブルが用意してあった。

祈りを捧げたあと、スープを口にした叔母がおいしい、と言った。何も口に出来なかった時を思うと、こんな小さなこともエディには格別の喜びなのだ。

「本当に美味しいわ。いくらでも食べられそう」

「まだあるから沢山食べて。体力をつけるようにってドクターも言ってた」

「エディ、ありがとう。私がこんなだから迷惑ばかりかけて・・・・・お前が居てくれて本当に良かった。いつも何もしてやれないけれど、クリスマスよ、欲しい物があつたら何でも好きな物を買いなさい」

「・・・叔母さん、僕、」

言いかけたエディを見詰めて、次の言葉を待つ叔母は終始笑顔だった。暫く無言のまま時が過ぎたが、それ以上言葉を続けることは出来なかった。結局、なんでもないとやり過ごす。

叔母もさして気に留めることなくスープをまた一口啜り、ああおいしい、と微笑む。

「明日は朝からダニエルさんの所で働いて、それからシンシアさんの所に行つて色々お手伝いしてくるよ。また下のレベッカさんに叔母さんのこと頼んでおくから安心してね」

ダニエルさん、というのは小さなパン工場を営む工場長だ。

そこで掃除からお遣い、配達などさまざまな雑用をやつて僅かでも賃金を貰っていた。人が好くさっぱりとした人でエディのこととても気にかけてくれている。

シンシアさんはエディの住む郊外とは反対の方角に向かった郊外に住む貧しい家庭で、教会で知り合った縁から何かと手伝いに行っている。

最近はまだ赤ちゃんが生まれて、家の中も大変そうだった。

家庭を支えるのはシンシアの夫と十五歳になる長男のケヴィンで、兄弟のいないエディは彼のことを兄のように慕っている。

食事の片づけを済ませ、二人は早めにそれぞれの布団に潜り込む。「おやすみ」とランプの明かりを消すと、暗闇が広がった。

エディは先程どうしても言い出せなかったことを考えていた。

実を言うと、欲しい物が一つだけある。それはありふれた“クリスマスカード”だった。

エディの両親はこの町から少し離れた所に住んでいた。両親と一緒に暮らせなくなったのは二歳の時で、それは母親の病気が原因だと聞いている。

確かに、記憶の中にある母親はいつも冷たい目でエディを見ていた。キスをしてくれたことも、抱いてくれた覚えさえない。

その頃まだ一緒に住んでいた父の妹であるカレンがよく面倒を看てくれた。

母親恋しさにエディはカレンに甘えたが、母親を思うといつの頃からそうしてはいけないと思うようにもなった。母は病気なのだからこれで自分が母を忘れてしまったらあまりに可哀相だ。

いつか良くなったら迎えに来ると、そう父は言っているのだそうだ。だからエディは毎年クリスマスカードを送っている。

内容はとても簡単、『お元気ですか。僕は元気です。お母様のご病気が早く良くなることを祈っています。メリー・クリスマス！』

時々『こんにちは！』を付け加えたり、『お母様が一日も早く』に書き換えたりもするが、正直エディはどうやって書いたらいいのかいつも迷った挙句、同じ様な文面に落ち着いてしまっていた。

そしてこれもいつからだろうか、もしも、本当に両親が迎えに来たとしたら、叔母は一人になってしまうのではないかと思うとクリスマスカードのことを言い出せなくなってしまった。エディ自身も年々複雑さを増す思いを持て余すようになっていく。

両親と暮らすことはきつととても嬉しいことに違いない。しかし、

叔母のことは母親以上に大切な存在で、しかも病弱とあつては離れて暮らすことなど考えられないのだ。

エディはそうしていつも考えることを止める。考えれば益々答えが分からなくなる。どうしたらみんなが幸せになれるのか。

エディはそつと目を閉じた。すぐに一日の疲労がきりのない思考を断ち切ってくれる。

小さな寝息が二つ、暗闇に並んだ。

## フランダースの子2

「ありがとさんエディ！今日はもうこれで仕舞いだよ。今日の分と少しだがクリスマスプレゼントだ」

につこりと、工場長であるダニエルから手渡されたのはいつものに上乗せされた賃金だった。

エディが何かを言いかけるのを素早く制して、ダニエルはさっさと奥に姿を隠す。エディは慌てて礼を言い、「メリー・クリスマス！」と言うと、ダニエルは片手を挙げてそれに答えた。

後姿が完全に見えなくなってから、貰ったばかりの賃金を両手に握り、工場を出た。

今日も相変わらず雪が降っている。しかし昨日ほどの大降りではなく、細雪がちらちらと舞っている程度だ。

シンシアの家はここから半時ほど行った郊外にある。その方向へ向かい通りを歩いていると、あちらこちらからクリスマスソングが耳に入ってきた。

それこそ三メートル毎に曲が変わるほどに通りはクリスマス一色である。

それもそのはず、今日は十二月二十四日、クリスマス・イヴ。

きよしこの夜　み告げうけし

まきびと達は　御子みこのみまえに

ぬかずきぬ　かしこみて

『サイレントナイト』が、エディは一番のお気に入りだった。し

んしんと降り積もる雪を想像させる。静かで穏やかな中に、希望の光が満ち溢れているような気がするのだ。

耳に入る曲が変わっても、何となくそれをずっと口ずさんでいたエディの目に、ふと、ある店の看板が映る。立ち止まって覗き込んだそれは、クリスマスカードを使ってデザインされた店のメニューだった。

暫く考え込むようにじっとしていたが、ふっと息を吐くと、エディは心の中で決心をする。

先程工場長のダニエルから多めに貰ったお金でちょうど一枚綺麗なカードが買えそうなのだ。

一年に一回、両親への手紙、叔母に内緒にしていれば、そんな気持ちになった。

そして叔母にはケーキを買ってあげよう、きつと喜ぶ。

帰りは大通りを通ろうと決めて、雪道をまた歩き出した。

シンシアの家に到着し扉の前に立った次の瞬間、ノックをしようとしたエディの手は空を切る。中から蒼白な顔をしたケヴィンが飛び出ようとしたがそこにエディの姿を見止め、同じように驚いた表情を浮かべた。

戸惑うエディに薄く微笑みかけ、彼は扉の外に出て来る。

「どうしたの、何か顔色が悪い。それに、赤ちゃんが泣いてる」

「丁度いい所に来てくれたね。赤ん坊が朝からああやって泣き止まない。少し前から酷くなってきたから、医者と呼ぶことにしたんだ」

そうして冷たい石造りの階段を駆け下りようとするケヴィンにエディは慌てて声をかける。

「どうやって行くつもり」

「走る」

「馬車呼んだ方が速い」

「お金がないさ」

まるで愚問だというように吐き捨てて、ケヴィンは階段に足をかけた。

「待つてケヴィン、お金なら僕が持つてゐる。何も言いつこなしだよ、管理人の所に行つて連絡してきて」

ケヴィンは振り返つてエディを見詰めた。エディも真剣な瞳を向ける。

ケヴィンは「分かつた」と呟くと、階段を駆け下りて行つた。

エディは急いで部屋に入り、一応挨拶をしてシンシアの元に行くと、彼女は泣き止まない赤ん坊を胸に必死であやしているところだつた。

顔を上げてエディを瞳に映すと、彼女もまた薄く微笑む。

「ケヴィンに会つたかしら、ごめんなさいね、どうもどこが悪いみたいなの。今日はクリスマスの準備を少し手伝つて貰おうと思つていたのだけど」

「安心して下さい。今ケヴィンが馬車を呼んでくれていますから、赤ちゃんを連れて行つて見てもらえばきっと大丈夫です」

「エディ、あなた、」

事情を察したシンシアが困つたように目を細めた。

表情を緩めてみせると、ありがとう、と言つたきり、赤ん坊に視線を戻す。

シンシアの夫はまだ帰宅していないようだ。今日も遅くまで仕事をするのかもしれない。

念のため書置きをしておきましょうか、とエディが言うと、シンシアも頷いた。

間もなくして馬車が来たとケヴィンが飛び込んで来た。シンシアと赤ん坊に防寒させると、エディを振り返る。

エディはポケットに入つていた全てのお金を掴み、ケヴィンの掌に乗せた。そこからいくらかをエディに戻したケヴィンがシンシアを支えてやりながら「すまない、」と呟いて部屋を出て行つた。

外まで見送つたエディはほつと吐息して、そのまま町へと足を向ける。歩きながら様々な思いが一瞬胸を掠めたが、やはり赤ん坊のことが一番気がかりだつた。何もなければいいが。

賑やかな町の通りにさしかかった時、エディはふと思い出したようにポケットからお金を取り出してみる。一番安いクリスマスカードなら買える値段。

そう頭に過つたが、エディが選んだ店はケーキ屋だった。叔母が喜ぶなら両親への便りはなにもきちんとしたカードでなくてもいい、その分今年は丁寧な文面で書こうと考えながら、店の扉に手をかけた。その時。

「あっちへ行け、まとわりつくな！」

ヒステリックな声に振り返ると、物乞いをする親子を振り払う男が居た。

親子は一人の母親と三人の幼い子どもたち、一人はまだ赤ん坊で、母親が抱き抱えている。

通行人は目を付けられまいと足早に通り過ぎて行くが、エディはなぜかそこから目が離せなかった。自然と視線を巡らせた親子と目が合う。すぐさま親子が歩み寄って来た。

「この子たちに食べるものを恵んでやって下さい、どうぞあなたさまの御慈悲を」

ぼろぼろの空き缶が差し出され、親子の視線が全てエディに集中する。よく見るとこの寒さにも関わらずみな薄着だった。

エディも決して裕福ではないが、沢山の人たちに助けられて今の自分があることを思った。エディはちらとケーキ屋に視線をやり、握っていた全てのお金を空き缶に入れた。

「メリー・クリスマス」

カタン、と小さな音と共に、エディの祝福が親子に向けられる。

親子は何度も礼を吹き、一輪の薔薇を差し出した。

「ありがとう」

エディは受け取ると、親子とは反対の方向へと歩き出す。ここからは歩いて一時間の道のり。

歩き慣れたいつもの道だが、さくさくと雪を踏み付けて歩く足取りは、決して軽いものではなかった。

気が付けば、手に持っているのは一輪の薔薇だけ。クリスマスに、叔母になにも買ってやれなかった。

そのことが少し寂しかったが、最近の叔母の体調の良さを思えば自然と心は軽くなった。

そうだ、何もなければあるもので工夫しよう。前向きに思考を方向転換させ、エディは家路を急いだ。

楽しいクリスマス・イヴに。

愛する叔母と、歌でも歌おうか……。そうして聖なる夜を、祝おうか……。

楽しいイヴになるはずだ、叔母と一緒になら、きっと、何もなくても。

エディの住む棟の扉を開けた時、それは知らされた。

レベツカのこれまで見たことも無いような蒼白な顔面が、何も言わなくとも叔母になにかあったことを伝えていた。

時が止まった、気がした。

白い雪の上に音もなく薔薇の花が転がる。

レベツカが何かを必死に叫んでいるようだが、もう何も耳に入っていない。

ただ本能のままに階段を駆け上がり、二階の一番奥の扉を勢いよく開け中を覗くと。

ベッドに横たわる叔母は、白かった。

一瞬、そこには何もないのではないかという錯覚に陥るほど、白かった。

ベッドに歩み寄りながら、叔母さん、と、エディは呟いていた、と思う。

自分の声も耳に入らない。



自分は果たして呟いたのか、よく分からなかった。  
でも唇が動く感触がある。

何度も、繰り返し、同じように動いている。

ただ、音だけが聞こえない。

喉の奥が擦り切れるような痛みも感じるのに。

ふと、白さが増した。

叔母が白の中に消えていく

「・・・イ・・・イ！ ツエドワード！しっかりしなさい！！」

聞き慣れない怒鳴り声と強く揺すられる感覚に、遠のきかけた意識は辛うじて保たれた。

急激に全てを取り戻し、はっと目を見開くと、エディは改めて叔母を覗き込んだ。

「何も聞かずに顔を蒼くして走り去るから驚くじゃないか。それにそんな大声を出したらカレンの体にも良くない、落ち着くんだよ、エディ」

レベツカが背中を擦りながら言った。

その言葉を反芻しながら、ゆっくりとレベツカを振り返る。

「・・・叔母さん、生きてるんだね・・・？」

「当たり前だ、莫迦なことを言うもんじゃない」

エディの言葉を強く否定する一方、ただ、と付け加える。

「今日も本当に体調が良さそうだったんだけど、急に倒れてね。あ、ほら、この手紙を見た後さ、意識を失ったんだ。今も高熱が続いてる」

「手紙、」

手袋を外し、言われた物を受け取って封筒を裏返したエディは目を丸くした。

差出人はアンソニー・ウィンストン、エディの父親の名だった。

### フランダースの子3

慌てて中を開いて手紙を読み始めたエディは、間もなく、手を震えさせ、手紙を取り落とす。

見開かれたままの瞳が捉えた文面は、信じ難いものだった。

『……妻に念願の男の子が生まれた。どのように伝えようと私は構わない。全ては終わった。これまで散々きみたたちにはつらい思いをさせたことはどう言って謝れば良いか分からない。だが、こうなった以上エドワードはもう必要ない。誠に勝手なことを頼んでいると分かっている。あの子はきみに返そう……』

エドワードはもう必要ない

「エディ、どうしたんだい」

「いえ、なんでも……あの、ぼく、」

ふらふらと立ち上がるエディの手を、弱々しく掴む手があった。

「エディ、……は、どこ」

はつとして叔母を見遣ると、視点の合わない目を泳がせている。

すぐに熱に浮かされたうわ言だと分かった。

頭の中は混乱したまま、「ここにいて」と呟いた。

「……は、どこ、エディ。サイムズは、どこ、どこ、……  
……ああ、サイムズ」

叔母が呼んだのは、自分ではなかった。それは、彼女の一人息子の名だった。

生き別れたままもう数年が過ぎ、時々こうして名を呼ぶことをエディも知っていた。

サイムズ、サイムズ、と繰り返されるうわ言にはもうエディの名はどこにもない。これまで感じたことのない、言葉に出来ぬ思いが込み上げ、エディはそつと叔母の手を離した。

「レベツカさん、僕、ドクターを呼んで来ます。叔母さんを、たのめますか」

「ああ、勿論さ。早く行つて来ておくれ、気をつけるんだよ」

そうしてエディは後退さるように部屋を出、階段を降り、棟の扉を開けて外へ出た。

いつの間にか陽の落ちた暗い道を、エディは闇雲に走り出した。雪に足を取られ、転びそうになっても走り続けた。

一体自分は誰なのだろう？

手紙には男の子が生まれたとあった。じゃあ、自分は？

父と母の子ではないの？

エディが一番悲しいのはそれではない。

父と母の子でないなら、叔母ともなんの繋がりもない他人ということになる。

一人だ、僕は一人になった。

どこに行けばいいの？どうしたらいいの？

気が付けば、クリスマス前夜のあのじわりとした興奮に包まれた大通りに居た。

人はまばらだ。きっと誰もが暖かい部屋の中で、家族揃って、楽しい晚餐の一時を過ごしているに違いない。

それに比べ僕は、と卑屈な考えに走りそうになるのを堪え、エディは真つ直ぐドクターの所へ向かう。

苦しそうな叔母の顔が通り、エディの胸を一層締め付けた。

きよしこの夜　御子の笑みに

めぐみのみ代の　あしたの光り

かがやけり　ほがらかに

教会の横を通り過ぎようとした時、透明な歌声が聞こえてきた。  
立ち止まり歌声に耳を傾けているうちに、エディの目から涙が溢れ出した。

ひざまず  
跪き、両手を合わせる。そして祈った。

明日はセイント・クリスマス。サンタクロースは子どもたちに、何でも好きなプレゼントをくれる。

それならば僕は、サイムズが欲しい。

どうか、叔母の息子サイムズを下さい。叔母にサイムズを下さい

顔を上げたエディは涙を拭き、立ち上がる。そしてそう遠くない  
ドクターの店へ走った。

「ドクター！」

サンタが笑う店の扉を勢いよく開けて叫ぶ。が、薄暗い店内に居たのはドクターではなく見知らぬ若い男性だった。

戸惑うエディに微笑みかけ、どうされましたか、と声をかける。

「あの、ドクターは」

「・・・・・・彼は」

微かに、青年が言い淀んだ。エディはぞっと背筋が凍る気がした。  
「まさか、ドクター・・・・・・っ」

ドクターまで僕を置いていくの、と今にも泣き出しそうなエディの表情に少々面食らって、青年は苦笑する。

「彼は奥さんに頼まれてケーキを買いに行ってる。すぐ戻るからと店番を頼まれているんだ」

それを聞いてエディは気の抜けたような顔になる。ほっと息を吐くと、カウンターから出てきた青年にパイプ椅子を勧められて座った。

青年はカウンターのの中から小さなストーブを持ち出し、エディと向かい合わせに座り込む。じっと見詰められる視線に気付いて、青年が少し首を傾げた。

「……あなたは？」

「怪しいかい。僕はドクターの息子さ。今年のクリスマスを期に帰って来たんだ」

「息子………。何さい？」

「二十四」

「ドクターは八十歳だよ？」

「察しがいいね。君は将来有望だ」

可笑しそうに笑う青年を、エディはますます怪しげに凝視する。ストーブの光りがゆらゆらと揺れた。

「君の思う通り、僕とドクターには血の繋がりは無い。でもそんなことは関係ないのさ。見掛けがどうでも、それに振り回されていたらずっと苦しいままだろう。本当のことは心で分かっている。大事なのは心、心で繋がっていることだよ」

エディは不思議な気持ちで青年から紡ぎ出される言葉を聞いた。体が温かいのはきっとストーブのせいではない。どこか力のある言葉。

また叔母の姿が頭に過るが、その表情は何故か幸せそうだった。

「僕、叔母さんと一緒に住んでいるんだけど、今日、僕の母さんは母さんではなくなって、父さんは父さんではなくなって、だから叔母さんともただの他人になってしまった。母さんは病気だから一緒に

に暮らせないと思っていたけど、そうじゃなかった。僕は母さんの子ではないからあんなにも冷たかったんだって気付いた。でも一番悲しいのは叔母さんが遠くに行ってしまったような気がして、血が繋がっていないと分かったら叔母さんとも一緒に暮らせなくなるんじゃないかって、そう思ったら、怖くて、寂しくて、どうしたらいいか分からなくなったんだ」

エディが声を震わせた。

静かに耳を傾けていた青年は、そっとエディの頬に手をやり、一筋の涙を優しく拭ってやる。

エディの瞳に映った青年は、オレンジの温かい光りの中で笑っていた。

「君の名前は」

「エドワード。みんなエディって呼んでる」

「エディ。君はとてもいい子だ。きつと叔母さんもそんな君を愛しているに違いないよ。叔母さんだけじゃない、ドクターだって、町の人だって、みんなエディのことが可愛くて堪らない。実の子ども以上に、君を愛している」

「どうしてそんなこと分かるの」

「不思議かい？簡単なことだ。僕もエディが大好きになったからさ」  
よく考えればおかしい理由を、こうも堂々と言ったのけられてはエディも笑うしかない。

初めて笑顔を見せたエディに、青年は軽くウィンクしてみせ、悪戯っぽく笑う。

「クリスマスには奇跡が起きるって、君は信じるかな？」

「……どうだろう。よくわからないけど、みんなが幸せになれる日であって欲しいな……」

自分に奇跡が起きることはないのだとしても。

それでみんなが幸せになれるなら　叔母さんが、笑ってくれるなら。それならば奇跡を信じて祈り続けようと、エディは心で思った。

寂しそうな瞳をしていたのかもしれない。青年は明るい声音で、  
「みんなが幸せになれる日、それはエディ、君も同じだ」  
そう、断言する。

青年は立ち上がり、カウンターのの中から一匹の子犬を連れ出す。  
そしてエディに手渡した。

「こいつはね、従順なフランダース産の犬なんだ」

「フランダース。あんな遠い所の犬」

「といってもそれは僕の勝手な想像だけれど。可哀相な捨て犬で人  
懐っこいから、パトラッシュと名付けた。だったらフランダース産  
だろう？」

「……屁理屈」

「どうか。それでいくと僕もフランダース産、君もフランダース  
産、かもしれないだろう」

「よく分からないよ」

眉を寄せたエディが正直に呟いた。

青年は「これが奇跡のはなし」と付け加え、意味ありげに微笑ん  
でいる。

腑に落ちないまま、しかしエディの心はぽかぽかと温かい。

「そいつ、パトラッシュ、温かいだろう。今日は君が抱いてお帰り」

「でも、あなたの大事な子でしょう」

「だからまた返して貰うよ。今度は僕がそいつを迎えに行く。この  
世でたった一人の、僕の兄弟を」

それを聞いてエディが笑った時、店の扉が軋んでドクターが帰っ  
て来た。すぐにエディの姿を見止めると、「どうした」と問った。

「ドクター！叔母さんが今日倒れて、今すごい高熱でうなされてい  
るんです。大丈夫でしょうか、一緒に来て貰えますか」

「それは大変だ、すぐに駆け付けよう。ああ、“サイムズ”、馬車  
を呼んでくれるか」

「え」

ドクターの口から飛び出た名に、反応したのはエディだった。



今、なんと言ったのか。

「もう零時を回ってますよ。来てくれるかどうか」

「いつもは夜の七時で店仕舞いするケーキ屋が開いてるくらいだ、起きとるよ。さあエディ、すぐ来るから近くまで歩こう。少しでも速い方がいい」

そう言つてドクターに背中を押され、エディは扉の方に歩いて行く。店の奥ではあの青年が何やら話しているのが聞こえた。

出て行く間際にもう一度振り返ると、一瞬だけ青年と目が合う。

あの吸い込まれそうな優しい瞳は、ずっとこちらに向けられていた。

エディはドクターと並んで歩きながら、パトラッシュをぎゅっと抱いた。

それに気が付いたドクターが子犬を見て言う。

「またあいつのなんとか産とかいう珍しい犬だろう。そいつだけは手放さんとか言っておったのに」

「パトラッシュ。だから、フランダース産だって……………彼が言いました」

「そうじゃったかの」

「なんだかよくわからない……………でも、彼は、サイムズは、僕も自分もフランダース産かもしれないって……………奇跡のはなしって」

「……………」

「叔母さんの名前、カレン・フランダースって言ってます……………。ドクター。何を知っているの？僕に本当のことを教えて下さい、僕は……………僕も、“フランダース産”……………？」

馬車がやって来た。

二人は乗り込み、暗い夜道を駆け抜ける。

腕にきつく抱きつくエディを優しく撫でながら、ドクターはぽつり、言葉を零す。

「いろいろ、大人には複雑な事情がある……………何があつたか

知らんが、エディ、カレンに全て話しておあげ。おまえたちが彼女の一番の薬だ、あつと言う間によくなるぞ……」

小さな窓の外を覗くと、あれほど長い間降り続いた雪が止んでいた。夜空には沢山の星が煌き、この聖なる夜を見守っている。

「おお、しまった、ケーキを持ってくれば良かったな。明日、サイムズに寄越させようかの」

すべての愛しい者たちへ。

メリー・クリスマス！

｝ f i n ｝

### フランダースの子3（後書き）

クリスマスのお話でした。

結末が分かりにくくないといいのですが・・・。

すつきりとしない感じがなあ（汗）

どういう終わり方がよくわかりませんという方、申し出て頂ければ個別にお教えます。すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6680i/>

---

フランダースの子

2010年10月15日19時20分発行